第２講：168「船遊び」

おやさと研究所講師
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

本講座では、おやさまの海外への思いを表している逸話とされる 168「船遊び」から天理教の世界たすけに向けた海外伝道に関して何を学ぶことができるのかについて、この逸話に対するこれまでの主な解釈や悟り、海外伝道と現代社会、そしておやさまのひながたにみる異文化伝道という点から考えてみた。

「船遊び」についての解釈や悟り

この逸話についての解釈や悟りでは、「船遊び」という言葉のイメージから、遊びの心境、楽しく晴れやかな心、親神の守護に身を委ね憩う様子などが想像されること、また海外で布教するには長い年限がかかること、長い年限が必要とされるほど世界にはたすけを待つ多くの人々がいるということなどがポイントとして挙げられている。

また、井上昭夫氏は、「船遊び」という言葉に関して「第一に、海外布教師にたとえられる船頭が、自力で習得した船を操る技法が求められるのである。『船遊び』が海外伝道を指していると言うならば、第二に『船遊び』とは、言語という技術、異文化理解という知識、難所を乗り越える経験と強靭な体力がいるということを意味していることに気づかなければならない。」（井上昭夫『天理教の世界化と地域化』日本地域社会研究所、2007 年、26 頁）と述べている。

つまり、おやさまの海外伝道に対する内なる思いを表すこの「船遊び」の逸話は、私たちがおやさまの世界たすけへの思いを汲み取り、海外伝道というものの特徴や性質、海外伝道を行う上で必要とされる事柄、海外伝道のためまた「陽気ぐらし」世界建設に向けて布教師がもつべき姿勢や心の持ち方などについて学び、考える機会を与えてくれていると言える。

海外伝道と現代社会

早田一郎氏は、海外伝道というものは日本での伝道とは異なる「未知の世界への異文化伝道」（早田一郎『天理教伝道史の諸相』天理大学おやさと研究所、2015 年、109 頁）であると述べている。この異文化伝道という言葉はこれまでもしばしば使われてきており、特別に新しい言葉であるとは言えないが、ここではこの異文化伝道ということについて、現代社会という視点からさらに考えてみたい。

現代の国際社会では、ヒト、モノ、カネ、情報の国境を越えた頻繁な往来や高度に情報化されたネット社会の発達により、グローバル化が一層進み、国家という枠組みがボーダーレス化していると言われる。このような世界情勢のなかで、多くの国では多様な民族的文化的背景を持った人々が共存する機会が増加し、さまざまな分野で価値観の多様性が生じている。日常生活においてさえも、人々は習慣、マナー、考え方、食生活などの違いを感じる機会が増えていると言ってもよい。これは、日本でも同様の傾向にあると考えられる。

このような社会では、天理教の海外伝道においても、これまで以上に異文化での伝道、異文化への伝道であるという意識を持つことが求められるように思われる。つまり海の向こう側という地理的な視点ではなく、異なる価値観、考え方、習慣を持つ人々へ教えを伝えていくという見方がより重要になってくるのではないだろうか。そして、人々に未知なる教えを伝えていくという点では、海外での伝道も国内での伝道も同じであると言える。

おやさまのひながたにみる異文化伝道

異文化伝道という視点からおやさまのひながたを見つめ直してみると、異文化への伝道がすでにひながたのなかに示されていることに気づかされる。おやさまが人々へ教えようとしたことは、当時の日本社会の習慣、風習とは大きく異なる部分があった。たとえば、おやさまは「男女の隔てなし」と説いた。当時の日本社会においては男尊女卑が一般的であったと考えられるが、「おふでさき」に「この木いもめまつをまつわゆハんでな　いかなる木いも月日をもわく」（7 号 21）とあるように、男女はともに親神の子ども、また一人の人間として平等なのだということを説かれている。ほかにもこのような例はたくさんあった。おやさまが教えようとしたことの多くは、当時の日本社会において常識であり当たり前だと考えられていたことに反しており、また当時の人々には全く理解できない「異文化」であったと言えるだろう。

このように、教祖のひながたの道を異文化伝道という視点から改めて見てみると、その「異文化さ」のゆえに、おやさまは当時の社会や文化における常識、人々にとって当たり前とされていたことと常に相対していたと言える。おやさまは当時の人々の文化や習慣とは異なる、あるいは相反する教えを、つまり当時の人々にとっては見たことも聞いたこともない「異文化」を伝える異文化伝道をすでに実践していたのである。言い換えれば、おやさまは海外伝道に関してもすでにそのひながたを残していたのである。

おわりに

本逸話「船遊び」は、おやさまの海外伝道への内なる思いを秘めたエピソードであると考えられ、この逸話から、私たちはおやさまの世界たすけに向けた海外伝道への思いの一端を知ることができる。現代社会はグローバル化が進み高度に情報化された状況にあり、もはや海外という言葉だけではとらえきれない状況下にあり、「異文化」がより強く意識される社会になっていると考えられる。その結果として、海外のみならず日本国内においても異文化伝道という考え方が今まで以上に重要になってくるであろう。

そして、海外ではなく異文化へと発想の転換をしてみることで、実はおやさまのひながたは異文化への伝道でもあったと気づかされる。さらに、海外伝道つまり異文化伝道は、海を越えた他の国々において行われるだけでなく、また海外に渡った人々あるいは海外で生まれ育った人々によってのみ行われるのではなく、天理教の信仰者一人ひとりが日々の生活のなかで行っていくことのできる、あるいは行っていくべき信仰実践であるということを、この「船遊び」の逸話から学ぶことができるのではないだろうか。